

# 潮音

東松島市図書館では平成24年6月から、市民の「東日本大震災の体験談」を収集中です。今回はそれに取り組むことになったきつかけと、この収集での出来事を書かせていただきます。

まずはきつかけです。図書館の機能には資料の収集・整理・保存があり、それらを得意とします。このことから震災以降、本・雑誌、新聞、写真、映像から、避難所や仮設住宅で張り出された物、折り込みチラシにいたるまで、東松島に関するあらゆる震災資料を集めてきました。

しかし、図書の発行物は、東北の沿岸地がどこも未曾有（み）そうの被害のため、東松島市の扱われ方は、写真数枚、統計的な数字が記載されているのみというパターンでした。そして他の被災自治体で

インターネット上で動画検索しても、目ぼしいヒットはなし。このままでは将来、本当に震災の出来事が消えてしまふと思ひ、市民の記憶にある生きた資料を直接収集していこうとビデオカメラ等で録音・録画を始めました。

150人を目標として活動中です。ちなみに1回の取材時間は30分から2時間半。取材対象者は小・中・高生から、消防団、民生委員、区長、医師、看護師、学校の先生と多岐に渡り、地域のバランスも考慮して行っています。話していただ

た。一方で近頃は、時間が経過したから話していただけることがあります。例えば、これまでは話の最後の方で大切な人を失った悲しみを一言に込めていた人が多かったのに対し、最近は発見された時の胸の内、その後の家族の様子など話

また、ほとんどの人は「話して少し楽になった」と言います。「仮設住宅ではみんな同じ環境で聞き流されてしまう事があるが、このようにきちんと聞いて受け止めてもらえることでご飯ものどを通して「この記録が後世に残り広くインターネットで発信されることで、助けてくれた人、駆けつけてくれた支援者に対して感謝ができ、肩の荷が下りる」とも言ってくれます。

今は、聴き手、記録、撮影と3人で行動しています。これは編集の効率性だけでなく、取材者のメンタルの管理を考慮しているからです。話を聞いている側が多々涙し、時として辛くなります。撮影・編集の中で「楽になった」とか、「感謝の言葉」が語られることで救われる思ひです。

## 震災アーカイブを集めて 加藤孔敬

は、支援団体などによる震災の記録として、被災写真や体験談の映像が撮影されていたのに対して、本市の場合はほとんどなかったのです。

しかし、スタート当初は苦戦の連続でした。市報で呼び掛けただけでは来てくれません。そのため、知人やつて、時には突然電話をしたり、直接伺ったりと少しずつ集めていきました。

結果、おかげさまで、これまで130人以上に協力をいただきました。現在は

内容は基本的には思うままに、自由にしていたいています。時間的なもので見ていくと、活動初年度だからこそ集められたのは、震災直後の克明な様子。津波に遭った恐怖や当夜の寒さ、不安なまま明かした長い一夜といった真に迫る体験談が多くありまし

てくれる人も出てきました。この他、職種や性別・年齢によっても内容は多様です。性別の傾向もあり、男性は震災発生から今日までの全体的な事、組織的な活動とその今後について語られ、女性は自分の内面的な事、相手の心情などを話す人が多く見られます。



かとう・よしとか 昭和45年7月、岩手県遠野市生まれ。東松島市図書館副館長。好きなことは、一日の終わりの一杯と楽しかったことを思い返すこと、ごろごろすること、たくさん笑うこと。同市矢本に妻と長男の3人暮らし。

現在、図書館のホームページにて、ダイジェスト版の文章と動画の一部を公開中です。お時間がある時に見ていただければ幸いです。